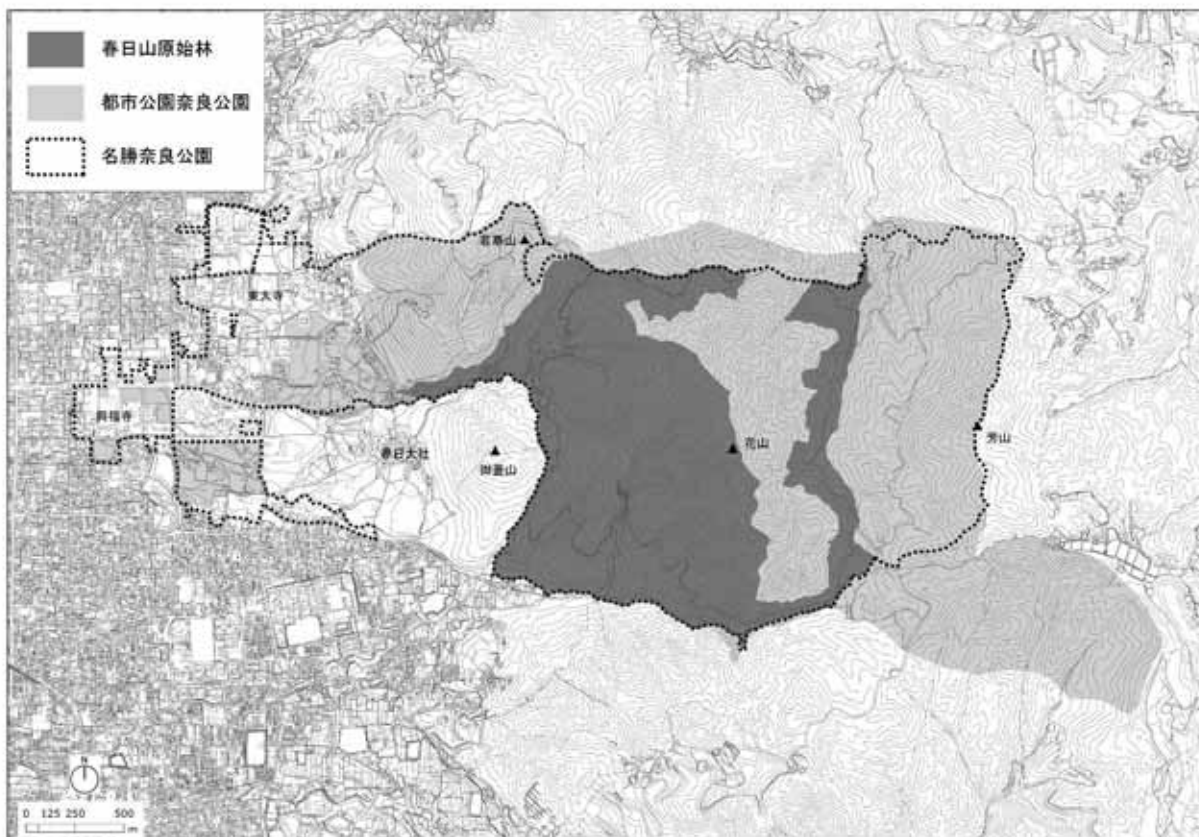


春日山原始林保全の基本的な考え方と保全方策（案）

古来、信仰の山として、大宮人の詩歌の対象として親しまれてきた春日山原始林の保全再生を進め、次代に継承するため、次に示す長期目標を設定する。そのうえで、喫緊の課題に対応するための効果的な方策を確立することを目指し、実証実験の実施とその経過を検証しながら、着実に春日山原始林の保全再生につながる取り組みを推進することを基本的な考え方とする。

春日山原始林の保全・再生目標

都市に近接しながらも古都奈良の貴重な財産として維持されてきた春日山原始林が持続的な森林更新により、巨樹・巨木を含めた樹木・草本で構成され、人や鹿とも共生できる森林となることを目標とする。



既往文献で指摘されてきた課題ならびに現地調査等から抽出された課題などを勘案しながら、下記に示すような対策、方策を進めるものとする。

(1) 後継樹の更新を誘導する対策の実施

春日山原始林の森林更新を誘導するために基礎的な条件となる土壌水分条件、光条件などを踏まえ、後継樹や実生が生育するギャップならびに大径木周辺について、シカをはじめとするは乳類の食害を緩和するための植生保護柵を設置する。特に、詳細調査の結果からアカガシの大径木周辺には実生、後継樹が確認されていない。極相林構成樹種であるアカガシは耐陰性に

優れており、食害以外の枯死が少ないと指摘されている¹ため、優先的に植生保護柵の設置を行う。

さらに、大径木は春日山原始林の更新を誘導する重要な樹木であると位置付けられるため、健全度の低く、かつ角トギが確認された大径木については、ラス巻などによる単木保護を実施する。

(2) 下層植生の衰退緩和策の実施

春日山原始林は、シダ類、コケ植物などの下層植生が豊かであり、このことが春日山原始林の特筆すべき生態的特質とされるが、これらの下層植生についても、現地調査の結果から衰退が確認されたが、この原因としてはシカの食害が影響していると推測される。

神奈川県丹沢山地では、冷温帯の自然林ではあるが、シカの採食圧により退行した林床植生の回復を目指して設置された植生保護柵の効果を検証している。ここでは、シカの採食圧が長期間持続している地域において多年生草本を保護回復させるためには、林床植生が退行後遅くとも10年以内に植生保護柵を設置することが望ましい²と結論づけている。

このため、上記の後継樹の更新誘導と併せて、下層植生の衰退を緩和させるため、多年生草本が多く生育する高茎草本型の林床で優先的に植生保護柵を設置する。ただし、現状では後継樹や実生樹木が確認されていないものの、潜在的な生育立地であると想定されるギャップについては、周辺の大径木などからの再入植によって後継樹が生育することが期待される。このように、春日山原始林全体のメタ個体群構造³保全の観点から植生保護柵の設置を検討する。この場合、植生保護柵の規模については、既往研究から⁴、30～40m四方程度を標準として現地の地形等にあわせて植栽保護柵を複数設置する。

(3) 原始林に関する基礎情報の充実

春日山原始林の現状に即した保全方策を効果的かつ効率的に展開していくためには、大径木およびギャップ調査をはじめとした既往調査結果、実証実験のモニタリング結果等の情報を点から面、さらには時間軸も考慮しながら蓄積するとともに、モニタリング調査結果に応じて更新できるような情報整備が必要である。例えば、航空レーダー測量等の事業を実施し、春日山原始林に関する基礎情報の一元化を可能とするデータベースを作成するとともに、その充実を図る。

(4) 外来樹種拡大の抑制策の実施

ギャップ調査の結果から約15%（64箇所のうち10箇所）の割合でナギ、ナンキンハゼを中心とした外来樹種の侵入が確認された。ナギ、ナンキンハゼについては、幼苗の段階で除去することが重要であると共に、成木の伐採なども必要とされる。

¹ 岡野哲郎「広葉樹林の更新機構に関する研究 - アカガシ実生稚樹の消長と分布様式」1987（九州大学年報9～10頁）

² 田村淳「シカの採食により退行した冷温帯自然林における植生保護柵による林床植生の回復」2009（神奈川県自然環境保全センター報告第7号79頁）

³ 生育可能な場所がパッチ状に分布しているとき、移動・分散によって結合する局所個体群の集まりをメタ個体群とよぶ。（出典：生態学辞典：共立出版534頁）

⁴ 田村淳「シカの採食により退行した冷温帯自然林における植生保護柵による林床植生の回復」2009（神奈川県自然環境保全センター報告第7号73頁）

このため、外来樹種拡大を抑制するため、巡視体制、巡視頻度、除去方法などを明記した外来樹種抑制のための計画を策定する。

(5) ナラ枯れ被害の拡大抑制策の実施・検討

ナラ枯れは被害の拡大速度が速く、ナラ枯れ木が確認された場合には速やかに対応策（伐倒くん蒸等）を実施することが求められている。

このため、上記の外来樹種拡大抑制と同様、巡視により早期に被害木を発見するための日常的な管理体制を構築すると共に、ナラ枯れ被害対策を実施している自治体の情報収集を行いながら、最新の効果的な手法を導入するよう努める。

(6) 保全計画の執行体制の確立

奈良公園地区の管理にかかわる管理主体（県、社寺、国立博物館等）同士の連携を深め、地区全体で、春日山原始林保全のための対策に取り組む。

また、県内関係団体等とも協力し、春日山原始林の保全のための実作業を進める体制づくりを推進する。

(7) 多様な主体の参画推進

広大な春日山原始林の保全再生目標を達成するためには、行政のみならず、県民などによる多くの主体が森林管理に関わる諸活動（巡視、植生保護柵の追跡調査など）への参加することが不可欠である。このため、新たな担い手の育成推進を目指す普及啓発等を通じて、多様な主体の参画を推進する。